平成 25 年秋季企画展解説資料①

郷土かるたの富士見

2013. 11

富士見市立難波田城資料館

はじめに

富士見市に市制が施行された昭和 47 年(1972)の秋、『富士見文化財かるた』が制作されました。このかるたは、郷土かるたブームの先駆けとなり、市民主体の文化運動としても注目をあびました。

この展示では富士見文化財かるたの実物と、制作の背景や技法を紹介します。合わせて、市内で制作された各種のカルタや同時期・近隣の郷土カルタも紹介します。また、カルタで取り上げられた文化財の現在の姿も紹介します。

なお、解説文では敬称を省略させていただきました。ご了承ください。

この展示の準備にあたって、資料調査および収集に、多くの個人、企業、公共機関から御教示、御協力をいただきました。ここに記し、感謝を申し上げます。

協力者

浅井孝　伊藤正和　菅沼重夫　たき△れんたろう　中山フジ江　原洋子　山口勇　若槻英隆

朝日新聞社　伊丹市教育委員会・同市立図書館　入間市博物館　大牟田市立三池カルタ歴史資料館

鹿嶋市教育委員会　熊谷市立熊谷図書館・同郷土資料展示室　埼玉県立図書館

彩の国ビジュアルプラザ　坂戸市教育委員会　狭山市立入曽公民館　所沢市教育委員会

府中市郷土の森博物館　水谷東地区社会福祉協議会

富士見市秘書広報課　富士見市立針ヶ谷小学校　同 関沢児童館　同 鶴瀬公民館　同 水谷東公民館

例　言

1. この資料は、富士見市立難波田城資料館が平成 25 年 10 月 19 日(土)から 26 年 1 月 13 日(祝)まで開催する、平成 25 年秋季企画展「郷土かるたの富士見」の展示解説である。
2. この展示では、展示図録は作成しないが、印刷資料の要望があることから、内製のパンフレットを作成することにした。展示内容が大きく２つに分れるため、パンフレットも２つに分けた。本書はそのうちカルタそのものを中心とする部分をまとめたものである。
3. 図版掲載した資料のうち、借用資料の所蔵者は個々に示した。
4. 本企画展の企画・構成および、この資料の執筆・編集は、当館学芸員早坂廣人が担当し、山野健一と田ノ上和宏が補佐した。
5. この資料に掲載した写真も早坂が撮影したが、1 点のみ借用した。

目　次

はじめに
協力者
例　言
目　次
1.　郷土カルタの成立と展開 ……2
1.1.　いろはカルタの展開 ……2
1.2.　『上毛かるた』の出現 ……2
1.3.　『熊谷いろはカルタ』 ……3
1.4.　文化財愛護カルタの登場（伊丹） ……4
1.5.　文化財愛護カルタの展開（鹿島） ……4
1.6.　「郷土カルタ」への回収（府中） ……4
1.7.　郷土カルタブーム ……6
2.　富士見文化財かるたの登場 ……8
2.1.　富士見市郷土史同好会 ……8
2.2.　ふじみ版画の会 ……8
2.3.　富士見文化財かるた誕生 ……8
2.4.　富士見文化財かるたの特徴(1)　絵札 ……16
2.5.　富士見文化財かるたの特徴(2)　読み句 ……16
2.6.　富士見文化財かるたの特徴(3)　名称・付属品 ……17
3.　富士見文化財かるたの影響 ……19
3.1.　マスメディアの反応と周知活動 ……19
3.2.　富士見の版画文化 ……19
3.3.　富士見市の創作カルタ ……21
3.4.　近隣の郷土カルタ ……23
3.5.　富士見市の文化財保護への影響 ……28
3.6.　富士見文化財かるたの活用 ……28
『富士見文化財かるた』関連年表 ……30
参考文献 ……31

企画展関連事業

■展示解説講座

題名/「いろは歌の誕生」から「郷土かるたブーム」まで　講師/ 早坂廣人

日時/ 平成 25 年 11 月 16 日(土) 14:00 ～ 15:30

会場/ 富士見市立難波田城資料館講座室

■ちょこっと体験：正月あそび

日時/ 平成 26 年 1 月 4 日(土)～ 5 日(日) 13:00 ～ 15:00

会場/ 富士見市立難波田城公園内旧金子家住宅

1.　郷土カルタの成立と展開

1.1.　いろはカルタの展開

特定の地域に固有の事物（史跡、景勝地、偉人、産物など）をテーマとして読み句が選ばれたカルタ（通常はいろはカルタ）を「郷土カルタ」と呼んでいる。

単に「いろはカルタ」というと「犬も歩けば…」ではじまる江戸系いろは譬(たとえ)カルタ（犬棒カルタ）を指すことが多いが、犬棒カルタが出現した江戸時代にはすでに、役者カルタや化物カルタ等、各種のいろはカルタが出現している。いろは頭置文芸や、物尽し、絵尽しが、いろはカルタという定型に吸収されていったのである。札という形態を取らずとも、いろはを頭置した語句のセットだけでも「歌留多」「かるた」と呼ぶようになった。以下、札が確認できないものについては「カルタ読み句」と呼び分けることがある。

江戸いろはカルタの全国への普及は、大正の頃という。同じ頃、児童教育への関心も強まり、各種の創作かるたが盛んになった。世相カルタ（『震災かるた』など）、人気者かるた（『オトギカルタ』など）、教訓カルタ（創作カルタだけでなく、いろは譬えカルタでも当時の価値観で不道徳な句は入替えられた）、学習カルタ、その他さまざまである。少年少女雑誌の付録として作られたものも多い。

学習カルタのバリエーションのひとつとして郷土カルタが出現した。現在知られている最古の郷土カルタは『横濱歴史イロハカルタ』(1923)であり、戦前の例は 20 種ほど知られている(以下、統計値は web サイト『郷土かるた館』のデータに基づく)。そのうち 14 点が昭和 6 ～ 9 年(1931-34)の 4 年間に集中している。この時期の小ブームは、この頃に推進された郷土教育運動との関係が指摘されている(原口・山口 1995)。既知の例は地域が分散し、また学校との関係が明瞭なものが過半を占めており、推測の裏付けとなる。郷土カルタの素材を提供した資料として、地域の文化人による名所尽しや、郷土誌（政府の主導により明治末期と昭和初期に各村で編纂された）が想定される。

日中戦争の開始(1937)から新憲法施行(1947)までの期間に作成された郷土カルタは確認されていない。この期間を特徴付けるのは、時局に沿った価値観を子供（少国民）に学ばせようとする教訓的なカルタである。

戦中には『愛国コドモカルタ』（昭和 15 年）、『愛国いろはかるた』（少国民文化協会、昭和 18 年）などがあり、終戦直後には『平和カルタ』（昭和 20 年？）、『新いろはかるた（新憲法カルタ）』（憲法普及会、昭和 22 年）などがある。比較すると、社会の価値観の変化と混乱が如実に表れている。筆頭札［い］を例にすると、

『愛国いろはかるた』は「伊勢の神風敵国降伏」

『新憲法カルタ』は「いくさをなくす新憲法」

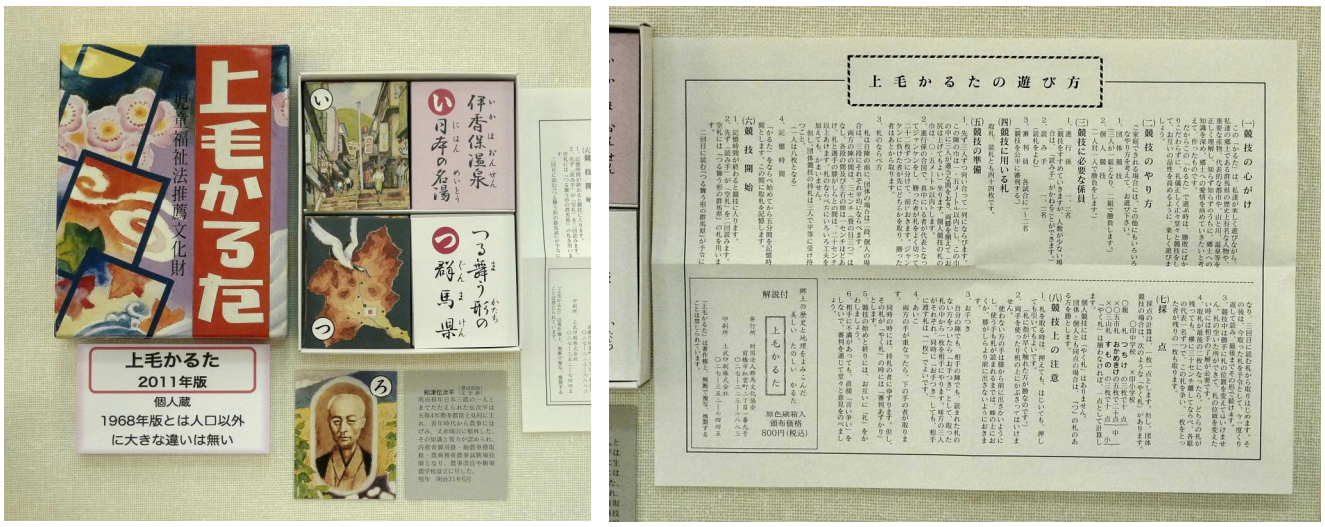
ところで、いろは譬えカルタの読み句の字数は、京かるたでは 8 字前後が中心であり、江戸かるたでも、12 字前後（七五型とそれに近いもの）が増えたが 7 字前後が中心であることには変りなかった。大正から戦前にかけて、一つのかるたの読み句を七五調か五七五調で統一する傾向が強まった。少国民向けカルタでは、句調が整っていない愛国コドモカルタを除く 3 例が七五調（七七調を含む）にまとまっている。

1.2.　『上毛かるた』の出現

終戦直後の価値観の混乱期に出現したのが『上毛かるた』(1947)であった。戦争被災者や生活に苦しむ人々への福祉活動を展開していた群馬県同胞援護会が、児童福祉活動のひとつとしてカルタを制作し県大会も開催した。制作の中心となった浦野匡彦(まさひこ)(1910-1986)は、占領下にあっても郷土愛を育むことが愛国心、人類愛につながるという思想を抱いていた。このためカルタの所々に「日本」という言葉が出現する（筆頭札も「(い)伊香保温泉日本の名湯」）。出版物・玩具に不足していた当時、上毛かるたは歓迎され、初年度に 1 万 2 千部、平成 24 年までに累計 140 万部も発行している。

句調は 44 句のうち七五調が 22 句、七七調が 17 句、五七五が 3 句となっている（その他 2 句）。短い字数のため形容句＋固有名詞の句が多く、「さっぱりした上州人気質に合っている」と評されている。

なお、群馬県同胞援護会を引継いで上毛かるたの発行を続けてきた群馬文化協会は、著作権と商標権を群馬県に譲渡して解散する方針を、平成 25 年 10 月 19 日に決定した。



第１図　上毛かるた（改訂版）

1.3.　『熊谷いろはカルタ』

『上毛かるた』は郷土カルタの王様と呼ばれ、群馬県民に親しまれているが、他県に大きなブームを起すことは無かった。昭和 43 年(1968)までに全国で制作された郷土カルタは十数例（うち 3 例が群馬県）が知られるのみである。

その数少ない例の中に、熊谷市の郷土史家によるカルタ（読み句のみ）が存在する。

熊谷市は埼玉県北部の中心都市で、昭和 20 年(1945) 8 月 15 日に“最後の空襲”を受けた。熊谷には戦前に「熊谷郷土会」があり、昭和 17 年までに 7 号の『熊谷郷土会誌』を出していた。この会が戦後に再興したのが「熊谷市郷土会」である。同会は昭和 25 年に『熊谷市郷土会誌』創刊号を出した。これに、戦前に熊谷市長を務めた斎藤茂八(1885-1964)が「熊谷いろはがるた」を掲載した。昭和 47 年に栗原益二により解説書が書かれたカルタの初出である（このカルタはこれまで製作年が不明であったが、熊谷市立図書館郷土資料展示室によって、非公開書庫から当該資料が発見された）。ようやく歴史研究が再開できる程度に復興したことを証する号に、元市長が郷里の名所・偉人を並べ上げることは、実に象徴的である。掲載誌の目次には“新作熊谷いろはがるた　斎藤茂八”とあり、本文の末尾に“文責　高木”（高木幹雄であろう）とあることから、この時に高木を筆記者としながら作成したものとしてよい。“新作”の語は、それ以前に“旧作”がある疑いも抱かせるが、郷土史研究誌という性格上、史料からの紹介と誤解されないための表現と考えてよいだろう。今のところ全体が確認された県内最古の郷土カルタ読み句である。

斎藤はのちに著書『苔の花』(1960)をまとめた。その中に前記読み句を改作した「熊谷いろはカルタ」が収められている。さらに、熊谷市郷土会の流れを汲む熊谷市郷土文化会の『熊谷市郷土文化会だより』2 号(1962)にも「熊谷いろはカルタ」が載っている。これは斎藤のものとは別内容で、署名は無いが編集者の日下部朝一郎の作と思われる。

これらのいずれも、カルタとして札が印刷されたことは確認できない。熊谷市全体を対象とした郷土カルタで、札の印刷が確認できるものは、熊谷市郷土文化会誌 49 号(1994)に発表され、2003 年に市立図書館が印刷した「熊谷郷土カルタ」（中島迪武・作）まで降ることになる。

時間を巻き戻す。上毛かるたは、昭和 43 年(1968)に改訂された。字札（読み句）の改訂は一部で、絵札が全面的に描き直された。経済の復興・高度成長により印刷環境が整備され、写実的な表現が可能になったことが大きな理由とされる。累計発行部数の 8 割はこの改訂版で、影響を受けた郷土カルタのほとんども改訂以降に発行されていることから、改訂版を参考にしている。結果的にブームに備えたお色直しとなった。

なお、新聞紙上でのみ確認できている、県内最古の可能性がある郷土カルタとして、『比企郷土カルタ』(比企文化社）がある。昭和 24 年(1949)4 月 25 日の埼玉新聞 2 面に「比企郷土カルタ募集」の記事があり（記事中で“再募集する”との表現有り）、6 月 19 日の同紙 2 面に入選作が決った旨の記事がある。また、埼玉新聞は昭和 29 年 12 月に 1 面で『埼玉郷土いろはかるた』を募集した。翌年元日号の付録で公表されたはずだが、紙面が確認できていない。

1.4.　文化財愛護カルタの登場（伊丹）

高度経済成長のさなかの昭和 41 年(1966)5 月、文化財保護委員会（43 年に改組して文化庁）から「文化財愛護シンボルマーク」が発表された。このマークは，ひろげた両掌の形で日本建築の斗きょうのイメージを表し、これを三つ重ねて文化財を過去・現在・未来にわたり伝承してゆく精神を象徴したものである。この年から、「文化財愛護地域活動」が推進され、モデル地区が指定された。その推進要綱によると“一定の地域社会…の住民が…学習の機会を積極的に設けて文化財に関する知識・理解を深めるとともに、各種団体による組織活動をとおして、文化財の巡視、清掃等の奉仕活動を行い、文化財を滅失、き損等の事故から守るための日常実践活動を進めるもの”であった。

モデル地区は 2 ヵ年単位で選ばれ国の財政支援を受けた。第 2 期である昭和 43・44 年度のモデル地区に選ばれた 30 市町村の中に、兵庫県伊丹市と茨城県鹿島町（現・鹿嶋市）が含まれていた。

伊丹市は、万葉集以来の歴史のある町であるが、昭和 30 年代に阪神間のベッドタウンとして宅地開発が進んでいた。それに対して文化財保護への関心か高まり、伊丹市文化財保存協会(S.38 結成)などの活動が繰広げられていた。昭和 41 年には、公団住宅の児童による「寺本公団文化財愛護少年団」が結成されていた。少年団の活動のひとつとして、42 年 1 月に『文化財愛護かるた』、翌年に『文化財愛護すごろく』が作成された。カルタは読み句・絵ともに団員が作り、自分たちのカルタ大会に使った。それまで、郷土カルタの作者といえば、その土地の先祖代々の住人であった。伊丹市では逆に、異なる地域に由来する子どもたちに集団性を育むための活動から、郷土カルタが生まれたのである。そして、郷土カルタの目的に、郷土を知る・愛郷心を育むにとどまらず、文化財愛護を加えたのである。正式名称に地域名を含まないことが象徴的である。

モデル地区に指定後の 44 年 12 月、手製のカルタの文字を活字に代えて、伊丹市文化財保存協会が刊行した。そして 45 年からの全市の子供によるカルタ大会に市長杯がかけられた（この大会は 40 年以上継続して開かれたが、現在は中断しており、再開が検討されているという）。

1.5.　文化財愛護カルタの展開（鹿島）

鹿島町もまた、鹿島神宮を中心に開けた歴史ある町である。しかし、昭和 38 年(1963)に事業を開始した鹿島臨海工業地帯の開発により、地域の姿が急速に変ろうとしていた。これに対して、昭和 41 年に「鹿島文化研究会」が発足していた。そして、文化財愛護モデル地区に選ばれた 43 年には「文化財愛護協会」が結成された。この協会の活動のひとつとして、昭和 45 年(1970)に『文化財愛護かるた』を作成した（発行日は翌年 1 月 1 日）。読み句を町民から募集し、町在住の画家に絵を依頼した。読み句の公募と画家への依頼は、以後、郷土カルタの典型的な作成方法となった。

文化財愛護モデル地区の活動内容は、文化庁による事例集の発刊や文化財愛護全国研究集会などで、他のモデル地区にも情報の共有が図られていた。関係者の直接的な言及は目にしていないが、鹿島町のカルタは同じ名称の伊丹市例を参考に発案した可能性が高い。ただし、それのみでなく上毛かるたも参考にした可能性がある。字札の裏に解説文があり、句形の構成（七五型が過半を占め、七七型が補い、僅かに五七五型を含む）が良く似ているのである。

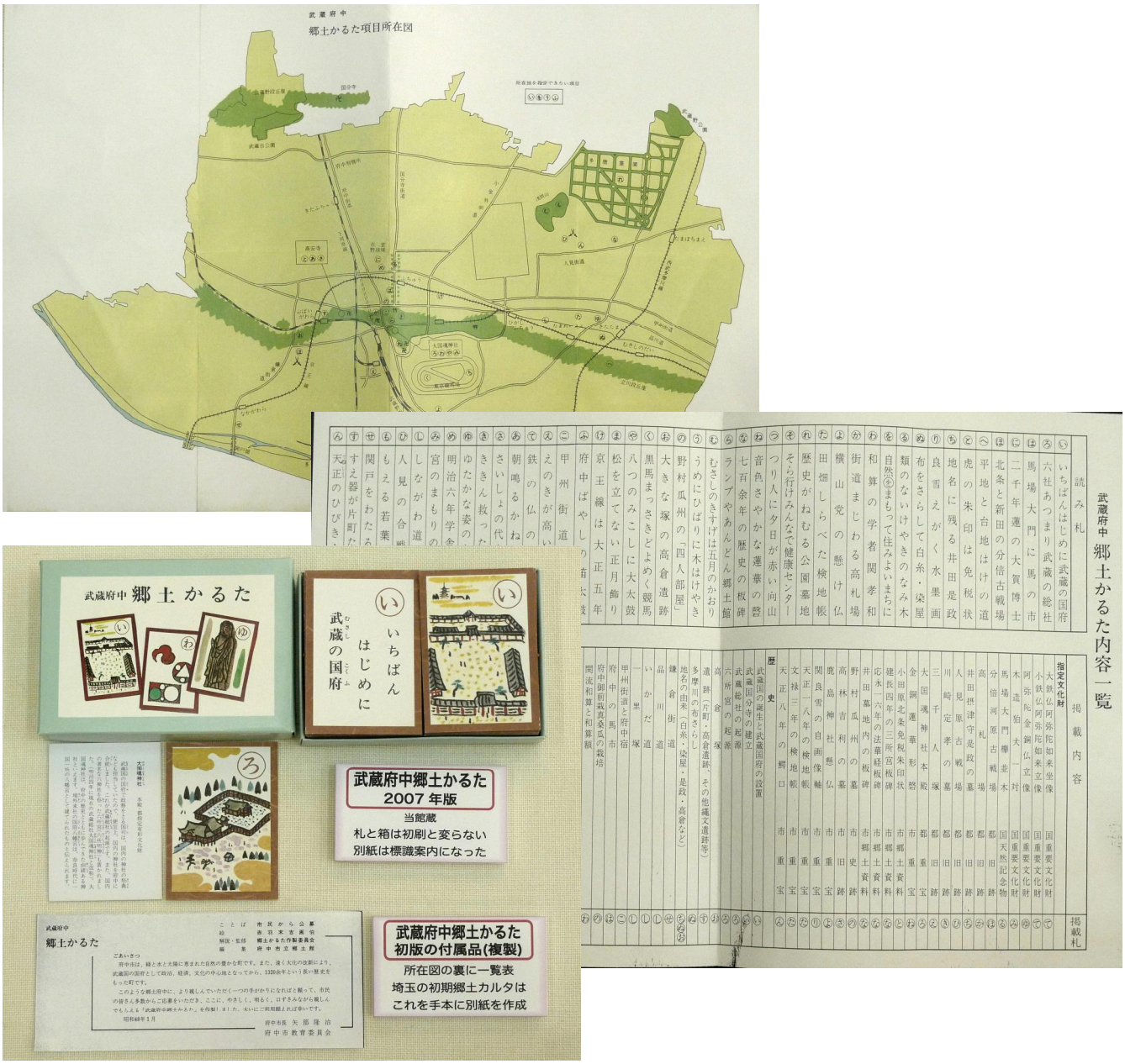
1.6.　「郷土カルタ」への回収（府中）

鹿島例を参考にしたであろう事例に、『武蔵府中郷土かるた』があげられる（S.48=1973.1 発行）。後述の富士見文化財かるたと同時期に編纂されていたカルタである。このカルタと鹿島例の類似は、句形・裏面の解説の共通にとどまらず、イロハ順の筆頭札も「いの一番に鹿島神宮」に対し「いちばんはじめに武蔵の国府」なのである。

一方、地域名＋"郷土" という名称は、昭和初期の小ブームでは普通だったが、戦後では稀なものであった。都内、特に多摩地区では、同形式の名称のかるたが続出した。文化財保護そのものをテーマにした札が無いことが名称と一致する。付属する別紙には、表（おもて）にテーマとなった事物の案内地図、裏に読み句一覧表と、分類別のテーマ：読み句対応表がある。このような別紙は、以後類例が多い。

第２図　文化財愛護かるた（伊丹市）

第３図　文化財愛護かるた（鹿島町）



第４図　武蔵府中郷土かるた

1.7. 郷土カルタブーム

インターネットサイト『郷土かるた館』のデータ (環境・食育カルタ以外で新規作成したものを集計)では、1958 年～ 1967 年に制作された郷土カルタは 2 件のみである。68 年以降は毎年欠かさず作成され、73 年に、1933・34 年に記録された年間最多の 4 件に並び、なお 2 年で 2 倍のペースで増加して 79 年の 28 件で小ピークに至る。80-90 年代は、年間 17 件から 39 件の間で増減を繰返しながら、平均 27.5 件のペースで作成される。90 年代末期にペースが低下したが、2001 年以降一転して増勢に転じ、2009 年に 117 件を記録する、という変化をたどっている。

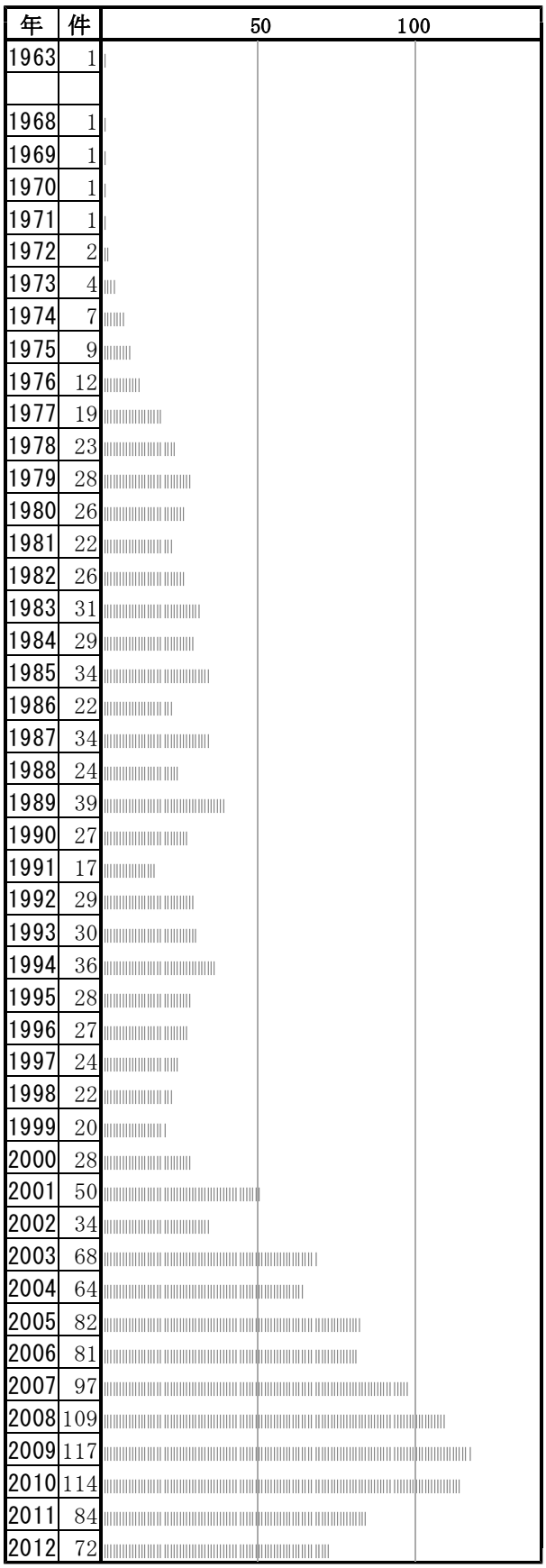
この変化については、調査方法による偏りの影響も考えられる。調査者は、公立図書館の蔵書データベースやインターネット検索により情報が得られたカルタを網羅したとのことである。公立図書館は 70 ～ 80 年代に整備が進んだため、それ以前と以後では図書館への寄贈による捕捉率が異なるであろう。また、日本でインターネットが一般に普及したのは 2000 年代であり、それ以降はネットでの捕捉率が高まったはずである。そのような要素を差引いても、70 年代の増加および 80 年代の定着、2000 年代の増加については実態を反映していると見られる。なぜなら、郷土カルタの制作動機に示された社会背景と整合的だからだ。

70 年代、高度経済成長の行き詰りから、古代史ブームや「ディスカバージャパン」に代表される歴史回顧・地方回帰の風潮が強まった。大都市近郊で拡大していたベッドタウンでは、それが地元の歴史を知ろうという動きとなり、その結晶が郷土カルタだった。また、回顧ブームの一端としてイロハカルタへの関心も高まっていた。74 年に刊行された『別冊太陽 いろはかるた』では郷土カルタを紹介するページもあり、ブームの一助となった。

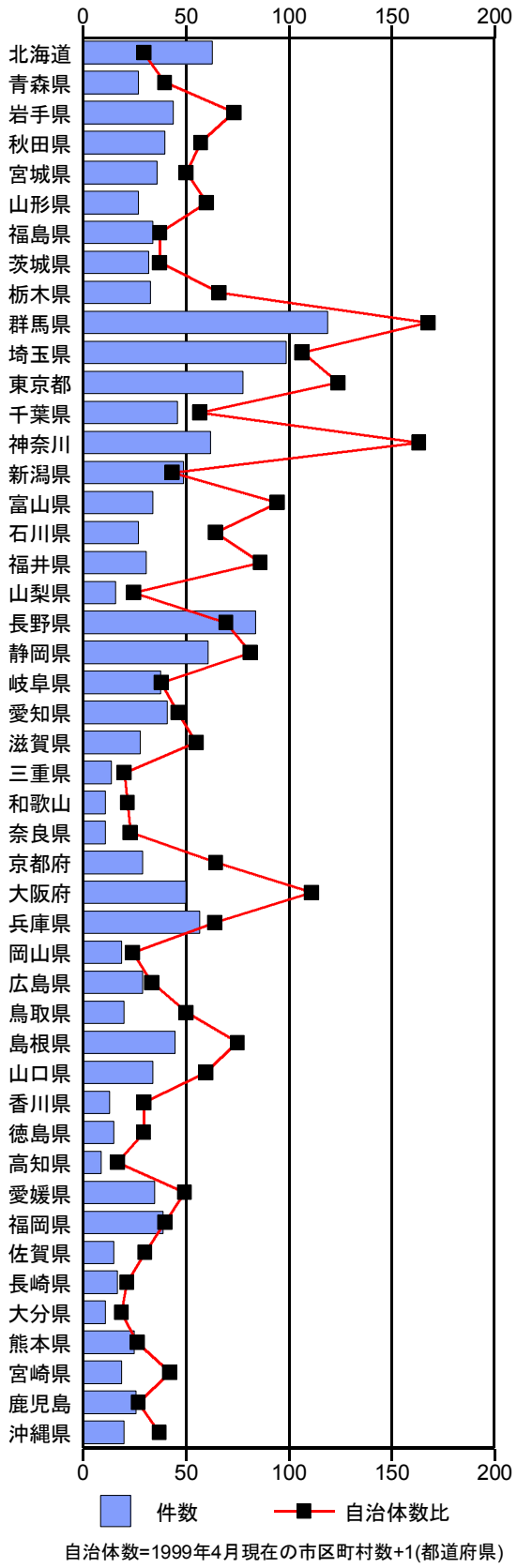
80 年代には「地方の時代」が呼号され、また、冷戦終結と平成への改元による時代転換の感覚も、90 年代にブームを維持する役割を果した。2000 年代は、新世紀という動機とともに、市町村合併の影響が大きい。合併の有無に関わらず、自治体単位への関心が高まったのである。

都道府県別の傾向も見ておこう。全国で 1725 件確認されているうち、都道府県別のベストファイブは、1 位群馬 119 件、2 位埼玉 99 件、3 位長野 84 件、4 位東京 78 件、5 位北海道 63 件となる。郷土カルタは自治体を単位に制作される場合が多いことから、平成の大合併直前の 1999 年 4 月現在の市区町村数+1(都道府県)を分母として、延べ制作率(同じ自治体内で複数制作している場合も含む)計算すると、全国的には 53.4 %、ベストファイブの 5 都府県が 100 %を越えており、1 位群馬 168 %、2 位神奈川 163 %、3 位東京 124 %、4 位大阪 111 %、5 位埼玉 106 %となる。盤石の群馬王国の他はベッドタウンが多い都府県で占められている。なお、神奈川県は横浜と川崎という 2 つの政令市の、行政区単位のカルタによって率が高くなっている。

埼玉県が、数においても「第 2 の郷土カルタ王国」と呼ばれることが裏づけられた。それだけではない。郷土カルタブームが立ち上がっていく 70 年代前半、最も多くの郷土カルタが制作されたのが埼玉県であり、その中でも富士見文化財かるたが大きな位置を占めているのである。以下、富士見文化財かるたを中心に、埼玉県南西部の郷土カルタの動向を見ていく。



第 5 図　郷土カルタの年別制作数



第 6 図　郷土カルタの都道府県別制作数

2.　富士見文化財かるたの登場

2.1.　富士見市郷土史同好会

富士見市の文化財保護のあゆみには、石造文化財の調査研究が大きな柱となってきた。

昭和 30 年(1955)頃、鶴瀬中学校の教員だった山口和夫が、「日待板碑」の探索を始めた。38 年(1963)、山口により村内の『板碑収録』がまとめられ、村教育委員会からガリ版刷で発行された。

昭和 43 年(1968)の暮、水子貝塚の国史跡指定の答申があり、それを伝える社会教育だよりで、将来資料館に展示する郷土資料の寄贈が呼びかけられた。

翌年の社会教育だよりでも 5 月に再度郷土資料の寄贈が呼びかけられ、6 月から「ふじみ諸史縁起」の連載が開始された。町文化財保護委員が交替で執筆した。7 月には郷土史同好会の結成と入会が呼びかけられたが、本格的な活動に至らなかった。

昭和 45 年(1970)9 月から翌年 3 月にかけて、鶴瀬公民館主催で全 8 回の郷土史教室が開かれた。郷土史研究者が交替で講師を務めた。

昭和 46 年(1971)1 月、郷土史教室の講師陣と参加者を主体として、郷土史同好会が正式に発足した。会長山口和夫、副会長大竹正太郎、ほかに伊藤正和、加藤和徳など合わせて 20 名の会員であった。3 月には会誌『郷土ふじみ』が創刊された。翌年第 2 号を刊行し、会員は 43 名に及んだ。この号から小口の版画が表紙を飾り、同氏は名誉会員となった。

2.2.　ふじみ版画の会

小口益一（1918-2009)は、長野県出身の版画家である。立体版画など多彩な版画技法を開発し，それらを駆使した作品で知られている。作品のテーマは土器や埴輪から、遡って生命の根源へ迫っていった。昭和 37 年(1962)に鶴瀬団地に入居し、45 年(1970)1 月に同団地の主婦を中心とする“ふじみ版画の会”の発足にかかわった。同会は、月例の研究会で小口に指導を受けて版画の各種技法を身につけた。毎年春秋の文化祭に作品を展示していたが、その集大成ともいうべき 47 年(1972)11 月の市民文化祭に向けて『富士見文化財かるた』を制作することになった。

2.3.　富士見文化財かるた誕生

同かるたが完成するまでの経緯は、小口により複数の文献で紹介されている。小口(1973.4, 1977, 1984a)から抜き書きする。着想は、市制施行の喜びもそこそこに市政が揺らいでいた昭和 47 年(1972) 4 月のことであった。

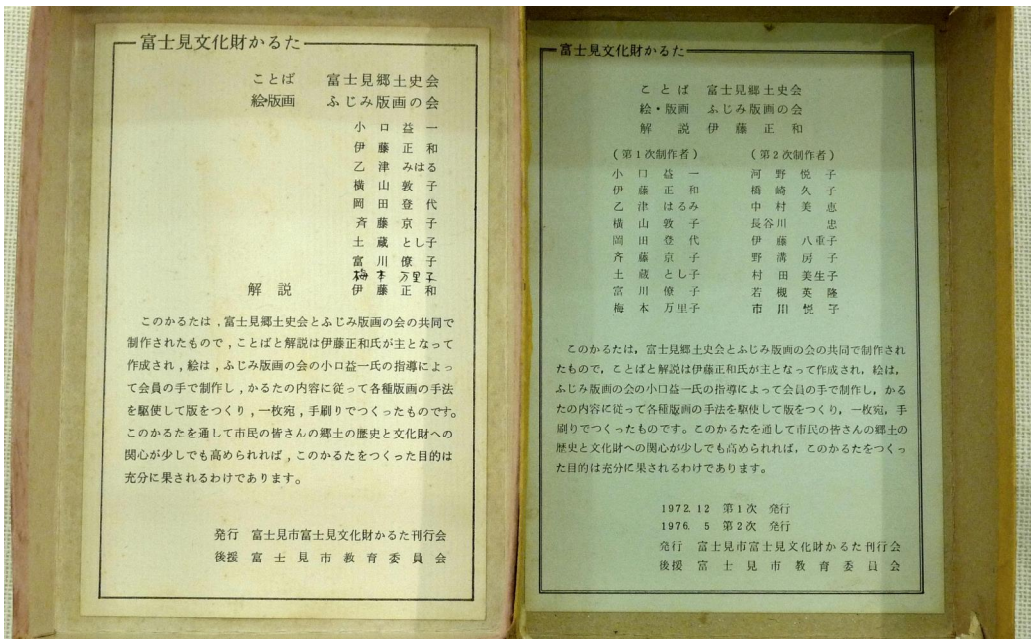
> “そのころの私と言えば…いわゆる埼玉都民の一人であった…新しい町づくりは町民の一人一人が、その居住地に愛着を持つことであり、それにはまず町を知ることから始めなければならないことに気がついた”“その頃…版画の旧友の谷田川卓氏のつくった「鹿島文化財かるた」の存在を知り…入手しました。…町のなりたちや、風物、文化財等をとおして自然発生的に新しい居住地に愛着を感じる…そのひとつの手段として「富士見文化財かるた」を頭に描いてみました…ふじみ版画の会の会員で、富士見市郷土史同好会員でもある伊藤正和氏にこの計画を相談したところ両手をあげて賛成してくれ、文化財の選定、読み言葉、および解説文の作成を同好会員にはかってくれ…伊藤氏が全部ひきうけることになりました…文案が完成したのが七月末日”

8 月は多忙だったため、9 月初めに小口と伊藤で文化財をめぐった。文化財ごとに下絵を描き版画技法を検討したのち、9 月 8 日の会で分担を決めた。会員は自転車で再度現地をまわるなどしたものの制作は、はかどらず、また、文字札の印刷にも誤算があり、厳しいスケジュールに追い込まれた。最後は会員の家族にも手伝ってもらい、11 月 1 日にようやく完成し、11 月 3 日の市民文化祭で展示することができた。

最初は、市内小中学校への寄贈用など 40 組だったが、頒布の求めに応じて 48 年末までに 300 組を増刷した。一方、48 年 7 月に、印刷会社により手札サイズの普及版を 2000 組制作した。50 年から版画の会の新会員が第 2 期の手刷りを行い、翌年 6 月に 100 組を完成させた。

第７図　富士見文化財かるた（第１期前半）

第８図　富士見文化財かるた（普及版）



富士見文化財かるた

ことば　富士見郷土史会
絵版画　ふじみ版画の会
小口益一
伊藤正和
乙津みはる
横山敦子
岡田登代
斉藤京子
土蔵とし子
富川僚子
梅木万里子
解説　伊藤正和

このかるたは，富士見郷土史会とふじみ版画の会の共同で制作されたもので，ことばと解説は伊藤正和氏が主となって作成され，絵は，ふじみ版画の会の小口益一氏の指導によって会員の手で制作し，かるたの内容に従って各種版画の手法を駆使して版をつくり，一枚宛，手刷りでつくったものです。このかるたを通して市民の皆さんの郷土の歴史と文化財への関心が少しでも高められれば，このかるたをつくった目的は充分に果されるわけであります。

発行　富士見市富士見文化財かるた刊行会
後援　富士見市教育委員会

富士見文化財かるた

ことば　富士見郷土史会
絵・版画　ふじみ版画の会
解説　伊藤正和

（第１次制作者）
小口益一
伊藤正和
乙津はるみ
横山敦子
岡田登代
斉藤京子
土蔵とし子
富川僚子
梅木万里子

（第２次制作者）
河野悦子
橋崎久子
中村美恵
長谷川忠
伊藤八重子
野溝房子
村田美生子
若槻英隆
市川悦子

このかるたは，富士見郷土史会とふじみ版画の会の共同で制作されたもので，ことばと解説は伊藤正和氏が主となって作成され，絵は，ふじみ版画の会の小口益一氏の指導によって会員の手で制作し，かるたの内容に従って各種版画の手法を駆使して版をつくり，一枚宛，手刷りでつくったものです。このかるたを通して市民の皆さんの郷土の歴史と文化財への関心が少しでも高められれば，このかるたをつくった目的は充分に果されるわけであります。

1972.12　第１次　発行
1976.5　第２次　発行
発行　富士見市富士見文化財かるた刊行会
後援　富士見市教育委員会

第９図　富士見文化財かるたのあいさつ文

第10図　富士見文化財かるた（第1期後半）　あ～く

第 11 図　富士見文化財かるた（第 1 期後半）　け～た

第 12 図　富士見文化財かるた（第 1 期後半）　ち～ね

第 13 図　富士見文化財かるた（第 1 期後半）　の～み

第 14 図　富士見文化財かるた（第 1 期後半）　む～り

第 15 図　富士見文化財かるた（第 1 期後半）　る～を・箱

2.4. 富士見文化財かるたの特徴(1) 絵札

富士見文化財かるたが、発案において鹿島町文化財愛護かるたの影響を受けたことは、箱に貼付された例言の構成や箱絵が鹿島町と酷似することでも裏付けられる。しかし、他は相違点の方が多い。

小口は最初に次のように構想した(小口 1973.4)。

①手刷の版画で作る
②普通のかるたの倍位の大きさにする
③文案は市民より募集する
④制作はふじみ版画の会のメンバーで行う

このうち③は鹿島町と同じ方針だったが、伊藤がすべてを引受けることになった。①②④は、版画の会の活動テーマとするためであり、このかるたの個性の多くはこれに起因する。絵札の方針が先立つカルタは珍しい。

単に版画にするだけならば、江戸時代のように、1 枚の版に数十枚の札をまとめて彫り、刷ってから切離すという方法が簡便である。しかし、会員に教えた各種の版画技法を発揮させることや、会員に振分けること、作品として発表することを考えると、個々の絵札を独立した版とし、扱い慣れた葉書サイズとすることが適当となる。また、会員の習熟度の差に対応できるよう、簡潔なデザインと細密なデザインを混ぜている。結果として、図柄や技法の多様性が独特の雰囲気を生んでいる。色彩も多く、平均 3.8 色を数える（同時に数色を印刷できる技法もあるため、色数＝版数ではない)。

小口(1984a)で、絵札 45 枚のうち 19 枚の作者や技法を解説している。作者は 10 名登場する。箱に明記された 9 名の他に、当時公民館職員だった若槻英隆(1943-)の名がある（若槻は社会教育専門職員という立場から、郷土史同好会の成立や市内の版画文化の興隆に大きな役割を果した)。

カルタに付属する別紙でも、個々の札がどの版種で刷られたかと、その簡単な解説が記されている。用いられた版種は

凸版：木版、フェルト版、紙版、芋版、亜鉛凸版
凹版：エッチング
孔版：シルクスクリーン、ステンシル、謄写版
凹凸版：立体版

の 10 種で、1 枚の札に複数の版種が組み合わされたものも多い。版種は絵の内容で使い分けられ、

ステンシル：民話、祭など素朴な感じのもの
立体版：石仏、土器など
エッチング：風景描写
木版：民俗芸能、民家など

といった具合であった。厚紙に直接刷ることができるシルクスクリーンとステンシルが最も多く、木版は和紙、エッチングは画用紙に印刷してから貼り合せたという。

版の比較により、1 次製作前半→普及版→ 1 次製作後半→ 2 次製作、という順番が把握できた。刷り手が習熟した 1 次後半が、色合が最も良く出ている。

［あ］の読み句は市内すべてに当てはまりうる。テーマは鶴瀬団地とされ、絵札に団地の写真が用いられる。これは版画の会が団地住人主体であればこそで、このカルタの原点を象徴したのである。また、戦前の犬棒カルタは［い］の札のみ赤く塗られることが多かった。句意に沿ったとはいえ、ほぼ全面に赤をかけたのは、これを踏まえた小口の趣向かもしれない。

経費節約のため、字札もシルクスクリーンによる版画とした。11 ポイント明朝体の解説文がうまく出せずに苦労したという。先例と異なり解説文を表面に印刷したのは、工程の節約とともに、展示が当初からの目的にあったからだろう。これは、遊びながらでも解説文が目に入るという効果を生んだ。

2.5. 富士見文化財かるたの特徴(2) 読み句

読み句を選定した伊藤正和(1927-)は、宮城県で生まれ育ち、東京都に勤めた。若くから考古学に関心があり、終の住処(つい すみか)は、水子貝塚がある富士見を選んだ。昭和 40 年(1965)に転入し、地域のさまざまな文化財を調査してきた。岡鹿之助に洋画を学んでいたことから、小口と交遊するようになった。この 2 人の結びつきがなければ、富士見文化財かるたは生まれなかった可能性が高い。

読み句の第 1 の特徴は、五七五であること。先例の郷土カルタが七五型主体であるのは、歴史的経緯にすぎない。読み句を文化財の単なる紹介ではない叙述とするには、最短の定型詩といわれる十七文字が適当であった。わずか数字の違いが実に大きい。各読み句から数文字削るとどうなるかを試みると実感するはずである。五七五型をはっきり逸脱するのは 3 句ある。[と][ふ][て]である。このうち[て]は五七五でまとまっているのにあえて擬音“ゴーン”を付けている。これについて作者は、「遊びです。この一言で、読み手も取

り手も楽しめるのです」と語った。実際、経験者から「“大応寺ゴーン”だけは覚えている」との証言もある。

読み句で取上げられたテーマには次のような傾向があり、この地域の歴史的特徴を反映している。

遺跡の札が多い　石造物の札が多い

偉人の札が無い　特産品の札が無い

札の配列に先例と異なるアイウエオ順を採用した。配列の筆頭札には象徴的な語句が用いられることが多い。伊丹も鹿島も武蔵府中もそうだった。富士見の筆頭札の［あ］の句にも富士山が入り、句の内容は市内すべてに当てはまりうる（見晴しが良い南向きの窓であれば）。ただしテーマは鶴瀬団地とされる。これについては、絵札の特徴で前述した。

文化財保護を訴えた［ら］は、鹿島の［わ］とテーマを一つにし、文化財愛護マークをあしらった絵札が同じである。この札の読み句について伊藤は「このカルタに込めた思いを表したもの」と語っている。

作者は、子供に楽しんでもらいたいと思いながら読み句を選んだが、学校の先生から「子供には難しい言葉が多い」と言われてしまったという。

2.6.　富士見文化財かるたの特徴(3)
名称・付属品

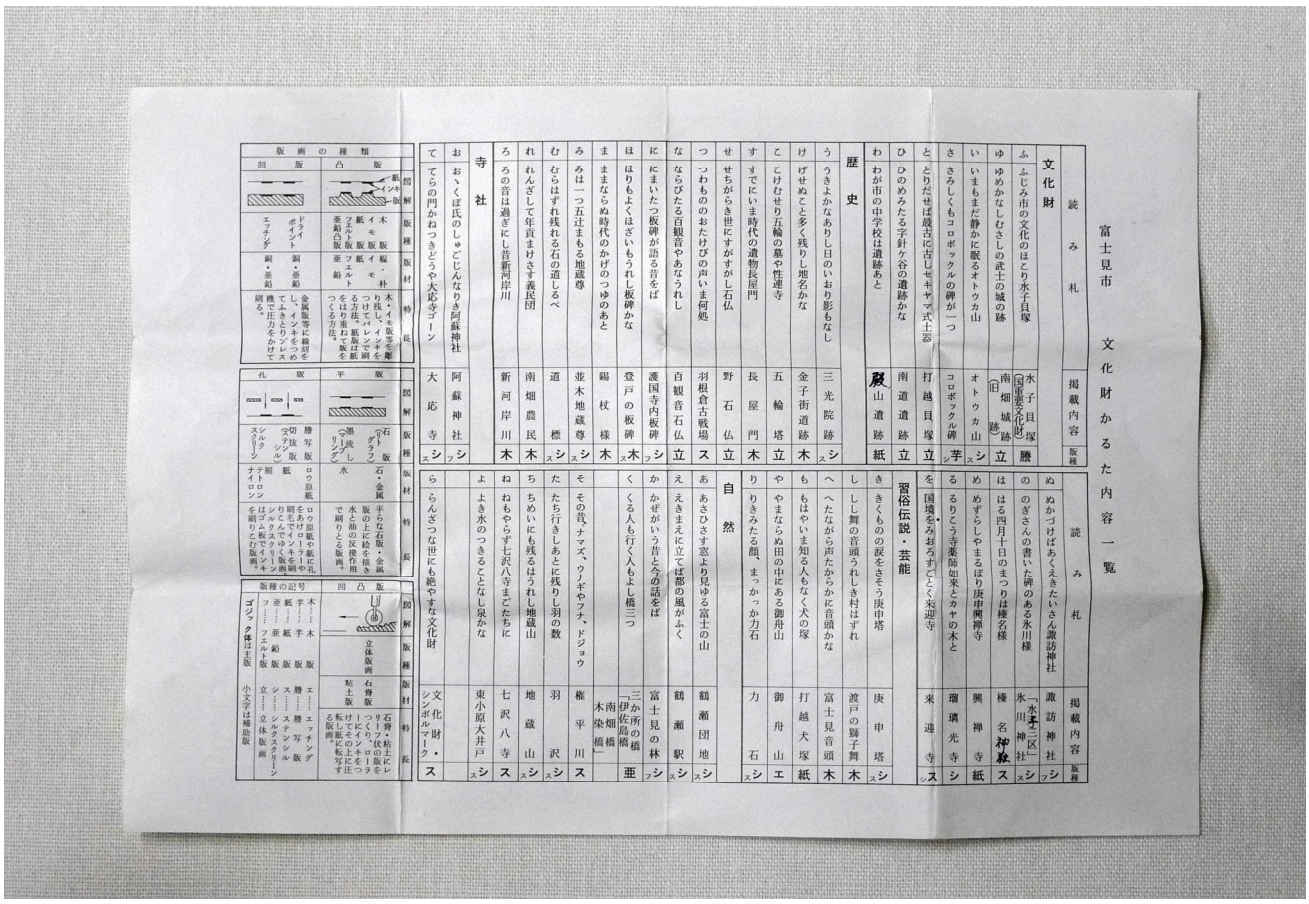
地域名＋"文化財" という名称は、このカルタが初出である。現在までに 12 例が知られるが、そのうち 4 例が埼玉県内である。

手刷版は、箱も手作りした。用紙のつなぎ目（側面の角）は、薄い紙を貼ることによって留めている。身の箱の一長辺が開くようになっているが、これは本格的なカルタの箱と同じである。札が大きいので、全札を重ねて一山にして納める。箱の平面サイズは札を 4 分して収めるタイプの百人一首に近い。

付属の別紙は、片面に一覧表、片面に文化財イラストマップを印刷している。48 年(1973)4 月開校の水谷東小学校が描かれているので、当初からのものではなく、おそらく普及版の付属品として作成し、手刷版にも加えたのであろう。構成は同年 1 月発行の武蔵府中例を参考にしているが、版種の欄と版種の説明表がある点は独特である。

第 16 図　{ゆ}の絵札。左から第 1 期前半、普及版、第 1 期後半、第 2 期)。左 2 点と右 2 点で版が異なる

第 17 図　{さ}の絵札。芋版の部分（コロボックル）は毎回版が異なる



富士見市　文化財かるた内容一覧

読み札	掲載内容	版種
文化財		
ふじみ市の文化のほこり水子貝塚	水子貝塚（国重要文化財）	勝
ゆゆめかなしむさしの武士の城の跡	南畑城跡（旧）	立
いいまもまだ静かに眠るオトウカ山	オトウカ山	シ
ささみしくもコロボックルの碑が一つ	コロボックル碑	芋
とどりだせば歳古に古しゼキヤマ式土器	打越貝塚	立
ひひのめみたる子針ケ谷の遺跡かな	南道遺跡	立
わわが市の中学校は遺跡あと	殿山遺跡	紙
歴史		
ううきよかなありし日のいおり彫もなし	三光院跡	シ
けけせぬこと多く残りし地名かな	金子街道跡	木
ここけむせり五輪の墓や性連寺	五輪塔	立
すすでにいま時代の遺物長屋門	長屋門	木
せせちがらき世にすがすがし石仏	野石仏	立
っっわものおたけびの声いま何処	羽根倉古戦場	ス
なならびたる百観音やあうれし	百観音石仏	立
にまいたつ板碑が語る昔をば	護国寺内板碑	シ
ほほりもよくほざいもうした板碑かな	登戸の板碑	木
ままならぬ時代のかげのつゆのあと	鍋杖様	木
みみは一つ五辻まもる地蔵尊	並木地蔵尊	シ
むむらはずれ残れる石の道しるべ	道標	ス
れれんざして年貢まけさす義民団	南畑農民	木
ろろの音は過ぎにし昔新河岸川	新河岸川	木
寺社		
ててらの門かねつきどうや大応寺ゴーン	大応寺	ス
おおくぼ氏のしゅごじんなりき阿蘇神社	阿蘇神社	シ
習俗伝説・芸能		
ぬぬかづけばあくえきたいさん諏訪神社	諏訪神社	シ
ののぎさんの書いた碑のある氷川様	氷川神社（水子二区）	シ
はは四月十日のまつりは榛名様	榛名神社	ス
めめずらしやまるほり庚申興禅寺	興禅寺	紙
ゆゆるりこう寺薬師如来とカヤの木と	瑠璃光寺	シ
よよ国境をみおろすでっこく来迎寺	来迎寺	ス
自然		
りりきみたる顔、まっかか力石	力石	シ
ぬぬしし舞の音頭うれしき村はずれ	渡戸の獅子舞	木
るるりこう寺庚申塔	庚申塔	シ
れれんざっな世にも絶やさな文化財	文化財シンボルマーク	ス
寺社		
ろろの音は過ぎにし昔新河岸川	新河岸川	木
ねねもやらず七沢八寺まごたちに	七沢八寺	ス
ちちめいにも残るはうれし地蔵山	地蔵山	シ
たたち行きしあとに残りし羽の数	羽沢	シ
そそのむかしナマズ、ウノギやフナ、ドジョウ	権平川	ス
自然		
ああさひさす窓より見ゆる富士の山	鶴瀬駅	シ
ええきまえに立てば都の風がふく	富士見の林	シ
くくる人も行く人もよし橋三つ	三か所の橋「伊佐島橋」「南畑橋」「木染橋」	亜
かかがいう昔と今の話をば	鶴瀬団地	シ
よよき水のつきることなし泉かな	東小原大井戸	シ
ららんざっな世にも絶やさな文化財		

版画の種類

	版種	版材	特長
凹版	紙版	インキ	
凸版	木版	桜・朴	木・イモ版等を使用
	イモ版	イモ	
	紙版	紙	紙をつけ重ねてボンドでとめる方法。紙版は紙を重ね重ねて版をつくる方法。
	フェルト版	フェルト	
	亜鉛凸版	亜鉛	
平版	ドライポイント	銅・亜鉛	金属版等に極細を刻みインキをためてムラとりをする。機で圧力をかけて刷る。
	エッチング	銅・亜鉛	
孔版	型紙版	紙	型紙をナイフで切り抜く。
	シルクスクリーン	絹	
	墨流し（マーブリング）	水	墨流しは水面に墨を流し模様を作る。
	石（グラフ）版	石・金属	平らな石版・金属版の上に絵を描き水と油の反撥作用で刷りとる版画。
	写版	ロウ原紙	ロウ原紙や紙に孔をあけ刷毛でインキをためてムラとりをする。
	勝写版	紙	
	孔版（シルク）	絹	
	ナイロン	テトロン	

版画の記号

凹凸版	版種	版材	特長
凸版	木版	木	
	写版	紙	
	亜鉛版	亜鉛	
	立体版画	石膏・粘土レリーフ状に絵を描き版画にする。	
	石膏版	石膏	
	粘土版	粘土	
凹版	エッチング版	銅・亜鉛	
	勝写版	紙	
	ステンシル版	紙	
	シルクスクリーン版	絹	
	立体版画	立体版画	

ゴシック体は主版
小文字は補助版

第 18 図　富士見市文化財かるた内容一覧

第 19 図　富士見市文化財かるた所在図

3.　富士見文化財かるたの影響

3.1.　マスメディアの反応と周知活動

市民文化祭で発表する直前の昭和 47 年(1972)　11 月 1 日、朝日新聞埼玉版に「富士見の文化財をカルタに 団地の主婦が手作り」という大きな記事が掲載された。この記事をきっかけに文化祭に来て「市内にこのようなものがあったのか」と並んで見学する新旧住民の姿があったという。

このほか、現時点で次の記事を確認している。

1973.1.5 朝日新聞埼玉版「文化財かるた大流行 富士見 鶴瀬団地のお正月」

1973.1.9 埼玉新聞西北版「これは珍しい！ 富士見文化財かるた」

1973.8.17　埼玉新聞「郷土の歴史をカルタに 富士見団地の主婦が版画制作 普及版も印刷」

テレビでも数回採り上げられた。54 年(1979)にテレビ埼玉が開局するまで、埼玉県の広報番組は、関東地方を放映地域とする民放で放映されていた。現在よりも多くの視聴者の目に触れていたと推定できる。

47 年(1972)　12 月、ＮＨＫの朝の番組に生出演した（『スタジオ 102』と推定される）。スタジオで手刷りを実演し、大きな反響があったという。

年明けの 1 月 10 日(水)　15:45-16:00、フジテレビ『こんにちは埼玉』で紹介された。団地で収録し、手刷りや子供のカルタ取りを実演した。

同 8 月 25 日(月)8:00-8:15 にＮＥＴ（現テレビ朝日）『ふるさとの詩』（自治省<現・総務省>の広報番組）で「主婦と版画と子どもたち」の副題で紹介された（小口(1973.11)で概要を知ることができる）。

50 年(1975)12 月 21 日(日) 8:45-8:55　日本テレビ『埼玉だより　郷土めぐりー富士見市』はカルタを軸に市内の様子を紹介した。

以上のうち『こんにちは埼玉』と『埼玉だより』は県が保存していた映像を、会場内で上映している。当時の市内風景の映像としても貴重である。

『月刊社会教育』1973 年 4 月号では小口自身によるレポートが掲載された。小口はその後も数回、同誌で地域文化についての記事を執筆し、カルタにも言及している。この雑誌は、全国の社会教育関係者が購読している雑誌である。すなわち、埼玉県内に限らず他の地域の郷土カルタの一部も、富士見文化財かるたを先例として発想された可能性がある。

また、50 年(1975)1 月 8 日の朝日新聞西埼玉版（限定）に「ぼくらのかるたはママの手づくり　富士見の児童館」という記事が載っている。記事の趣旨は児童館で文化財かるたが楽しまれているというものだが、“市長が全国市長会などで披露してかっさいを受け、それ以来、全国各地で同じような「かるた」がはやっている。”と締めくくる。当時の市内には、ブームの先駆けになったという意識があったことが伺える。

3.2.　富士見の版画文化

文化財かるたの成功もあって、市内では版画による文化活動が盛んとなった。

昭和 48 年(1973)、鶴瀬公民館版画講座の受講者により版画絵本『あとかくしのゆき』と『海』が制作され、文化財かるたと同様に大きな反響があった。

52 年(1977)、南畑公民館版画講座の受講者により版画カレンダーが制作された。

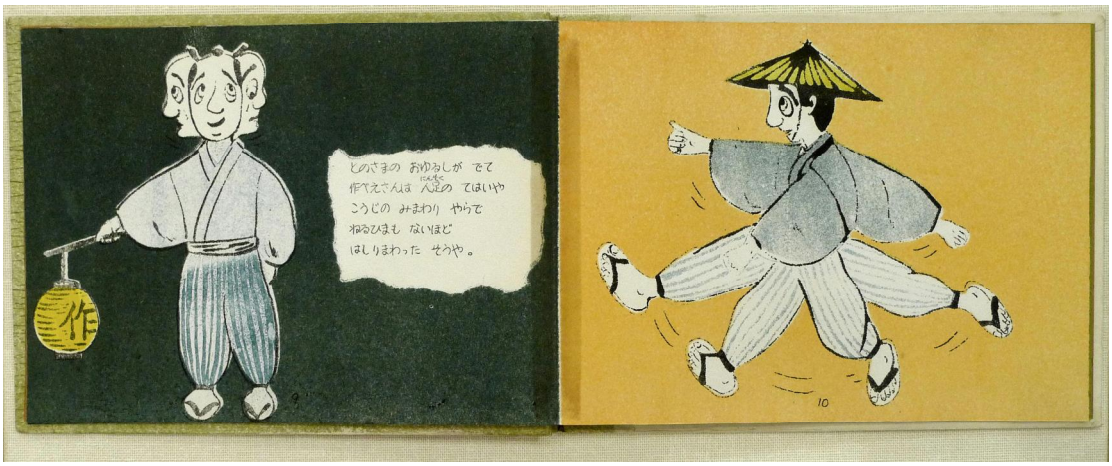
58 年(1983)には図書館友の会により、市内の伝説に基づく版画絵本『作べえさん』が制作された。同じく 58 年(1983)に“版画サークル・ふじみ”により「水子貝塚」、60 年(1985)には“はんの会”により「けものの貌を持つ土器」が共同製作された。これらは広域的な版画の交流展に出品された。

この他にも、多くの個人作品や社会教育事業に伴う版画が小口(1985)で紹介されている。後述の創作カルタのうち 2 例も版画で製作された。

1970 ～ 80 年代の市内の地域文化を語る上で、版画は欠かせない存在であり、しかも文化財の普及活動と結びついていた。

第 20 図　『埼玉だより』の画面
（彩の国ビジュアルプラザ提供）

第 21 図　版画用具の各種



第 22 図　版画絵本「作べえさん」

第 23 図　共同製作版画「水子貝塚」・「けものの貌を持つ土器」

3.3. 富士見市の創作カルタ

富士見文化財かるた以降、市内で創作されたカルタ（読み句のみのものを含む）は５件を把握している。制作母体により３種類に分けられる。

第 1 は公民館または地区を活動拠点とする団体によるもので、3 件ある。いずれも市民の関心が高いテーマによる。『健康かるた』(1978)は、南畑公民館を拠点とする高齢者学習団体「しもつき会」が作成した。会の社会貢献活動として企画され、小口の指導を受けた手刷版画である。『平和かるた』(1987)は、水谷東公民館の高齢者学級を母体とする。この学級の、戦争体験をテーマとする文集で“戦時かるた”を発表した参加者があり、それを 1 年かけてカルタ化した。版画は小口が指導し、図書館友の会も協力した。『福祉いろはカルタ』(2011)は、水谷東地区社会福祉協議会の事業で、複数年の事業として実施したことがユニークである。いろは歌を区切って、1 年に数文字ずつ読み句を募集し、7 ～ 8 年かけて読み句が揃った。次に絵札の募集も試みたがうまくいかなかったため、漫画家志望の住民に依頼して絵札が完成した。

次に学校を母体とするカルタとして『針小郷土かるた』(1985)がある。昭和 59 年(1984)の開校直後に、一体感を育むために校長が企画した。初年度は冬休みの宿題として読み句を考え、2 年目に絵札を制作し、第 1 回カルタ大会を実施した。以後、現在まで 1 月のカルタ大会が継続している。制作時期や方法、大会の開催などから、『さいたま郷土かるた』の影響が考えられる。

最後に、地域史学習団体が母体となる『郷土史いろはかるた』(1989)がある（→ 29 ページ）。これは「富士見市郷土史を知る会」の記念誌に、同会の記録係をつとめた菅沼重夫が発表したもので、札は制作されていない。菅沼は発表後も推敲を重ねており、現在は「郷土史編」「武蔵野台地と湧き水編」の２編からなる「富士見郷土史カルタ」となっている。

第 24 図　健康かるた

第 25 図　針小郷土かるた

第 26 図　平和かるた

第 27 図　福祉かるた（水谷東公民館蔵）

3.4. 近隣の郷土カルタ

埼玉県入間地区では、富士見から２年位内に３組、8年後までにさらに２組の郷土カルタが作られている。全国的に郷土カルタブームが始った時期ではあるが、これほどの密度で製作された地域は他に無い。旧郡域を基礎とする地区ブロックは、行政的な情報交換の機会が多く、富士見例を発端に広まったと理解してよいが、武蔵府中例の影響もある。

文化財愛護モデル地区に指定されていた川越市が制作した『川越市文化財かるた』(1973)は、歴史ある町にふさわしく、すべての札が指定文化財を主題とする。もっとも、市民から読み句を募集した時には“川越の特色を読込んだもの”“文化財保護をうたったもの”“躍進する川越の姿をたたえるもの”も対象で、入選作にも含まれていた（埼玉新聞 1973.3.10）。編集の過程でほとんどの入選作が不採用となり、指定文化財カルタに様変りしたのであった。また、絵札の応募者の中から池原昭治が選ばれて、すべての札を描くことになった（東上新聞 1973.4.1）。

『狭山市郷土かるた』(1974)は、公民館を拠点とする地域学習グループが作った。字札と絵札の縁の色が異なる点など、川越の影響が強い。川越例では市街中心地の分布図がある別紙一覧表の左が空白となっている。絵札も狭山市在住の池原が描いている。現在「童絵(民話絵)」の第一人者として著名な池原は、当時、東映動画から独立した直後だった。これらのカルタはその時期の作品としても貴重である。川越例はアニメ原画のように濃淡が無い彩色で、狭山例は筆遣いが見える情緒的な彩色という違いがあることも、興味深い。群馬県の『太田市市民憲章カルタ』(1980)は、同じく池原が絵を描いているからか、箱や別紙の体裁が狭山とよく似ており、同県の『富岡市民憲章かるた』(1987)にも継承されている。

『所沢市郷土かるた』(1974)は、箱や札の体裁、七五型中心の読み句など、武蔵府中例の影響が強い。地理的・歴史的なつながりを反映しているだろう。[所]を頭字とする札がユニークである。なお、別冊太陽 9号で 1970 年発行とあるのはあやまりである。

『入間市郷土かるた』(1979)は、洋画家の高橋卯八を中心に制作された。他例に比べ札の長辺が短い。原画キャンバスの縦横比を反映したのであろうか。

『坂戸市文化かるた』(1980)は、縁と裏面を同じ色に刷ること（本格的カルタの模倣）、頭字が四角いこと、箱が引出し式、など独自な特徴が多い。

『飯能郷土史かるた』(1983。写真なし）は、飯能郷土史研究会が作成した。狭山例との共通点が多いが、絵札のデザインは坂戸例に共通している。

地区は異なるが、富士見市と同じ東武東上線沿線の『和光市文化かるた』(1983。写真なし）は、和光市文学散歩同好会が数年をかけて自主制作した。札が一回り大きく、解説文が絵札の裏にあり、字札が墨書で頭字を強調せず、と個性に富む。{ぬ} の読み句が富士見文化財かるたと同じで、興味深い。

入間地区の動きを受けて埼玉県全域を対象とするカルタも作られた。

『埼玉かるた』(1974)は、熊谷市の新興住宅地の主婦 2 名が制作した。読み句の一部や、字札裏の解説文の構成、読札が墨書であるなどの諸点で上毛かるたを参考にしている。一方、札や箱のサイズは川越・狭山例に近似する。読み句に七五・七七型と五七五型が混じる点も、混合的性質をよく示す。当時の県知事（畑和）の推薦文がついている。

昭和 57 年(1982)11 月『さいたま郷土かるた』が、埼玉県教育委員会により制作された。埼玉県子ども会連絡協議会が協力しており、同年度から、「さいたま郷土かるた県大会」が開催され続けている（平成 18 年度から「彩の国 21 世紀郷土かるた県大会」）。大会の運営や、カルタに同封される競技方法などは、上毛かるたを参考にしている。一方、札のサイズや五七五の句形、イラストマップの添付は県内の先例と共通する。このカルタは子ども会組織を通して大きな影響力を持ち、以後県内で制作された郷土カルタ（特に公的なもの）のほとんどがこれに類似する。富士見市近隣の例では『あさか郷土かるた』(1989)、『しき郷土かるた』(1993)、『かわごえ郷土カルタ』(2002)がある。『さいたま郷土かるた』の影響は県内にとどまらない。千葉県（『房総子どもかるた』等）や東京都（『豊島区郷土かるた』等）にもその影響が広がっている。

時期的に『さいたま郷土かるた』の刺戟は否めないが『にいざかるた』(1984)は独特である。市立陣屋小学校の教員が中心になり制作した。同教員は群馬県出身であり発想の原点は『上毛かるた』だという。絵札は小学生の絵、読札は墨書、謄写版でボール紙に印刷し切断、色鉛筆やフェルトペンで着色、という製作方法はおおむね伊丹例と共通する。直接の参照関係は無いが、製作環境の共通性による。

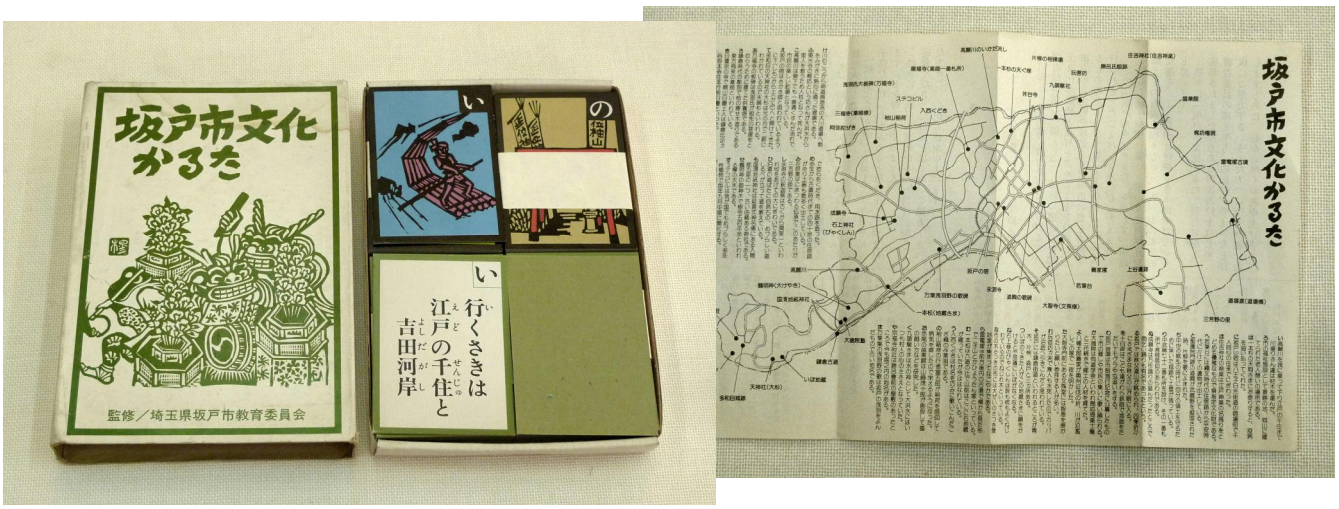
なお、富士見市と最も交流の深い入間東部地区の上福岡市（現・ふじみ野市）、大井町（同上）、三芳町では、郷土カルタが作られていない。

第 28 図　川越市文化財かるた

第 29 図　所沢市郷土かるた（所沢市教育委員会蔵）

第 30 図　狭山市郷土かるた（狭山市入曽公民館蔵）

第 31 図　入間市郷土かるた（入間市博物館蔵）



第 32 図　坂戸市文化かるた（鶴瀬公民館蔵）

第 33 図　さいたま郷土かるた

第 34 図　にいざかるた（山口勇蔵）

第 35 図　しき郷土かるた

3.5.　富士見市の文化財保護への影響

富士見文化財かるたは、市内の文化財への関心を高めた。これに応えるべく、昭和 48 年(1973)12 月、『富士見のさんぽ道』が富士見市郷土史同好会から刊行された。会員 12 名（市の文化財専門職員も含む）が分担執筆した。市内各所の文化財や見どころ 52 項目を各 1 ～ 2 ページで紹介している。富士見文化財かるたで取り上げられた事物は、地蔵山を除きすべて採り上げ、針ヶ谷地区と南畑地区の文化財を 9 件補う。富士見文化財かるたの解説書を強く意識した企画である。あとがきにこう記される。

> “「何か手ごろな郷土史の本はないか？」と、よくご質問をうけるたびに、私たちは心苦しい思い…(略)…この小冊子が皆さんのご要望に少しでもお応えできたなら望外の喜び”

同書は翌年 6 月に市教育委員会から増刷された。そのあとがきにこう記される。

> “富士見市は、行政にたよらないで市民の手による郷土の歴史研究は、他の市町村に優るとも劣らない…(略)…できうれば市民（団体）と行政が一体となって取りくめる姿勢とか条件をお互いにつくりあげていく…(略)…今回…(略)…郷土史同好会の熱意と努力に富士見市（行政）がやっと答えられた”

55 年(1980)に出版された『富士見風土記』は、『ふじみの散歩道』の改訂版として企画され、文化財審議会委員が分担執筆した。分類別の配列で、57 項目が解説される。『散歩道』で採り上げられなかった話題を積極的に採り上げており、改訂版というよりも相補う資料といった方が内容をよく表す。

以上の 2 書は、市内の文化財の総括的な解説として、いまなお代るものがない。内容が古びた部分はあるが、それも執筆時点の状況記録として意義が高い。

富士見市郷土史同好会は、昭和 50 年代には会としての活動が不活発になったが、会員は個人として、あるいは文化財審議会の委員として、文化財の調査や保存に尽力した。その一人の大竹正太郎を講師として、昭和 55 年(1980）に「富士見市郷土史を知る会」が結成された。会員は鶴瀬公民館郷土史セミナーの参加者だった。同会は平成元年(1989）に解散したが、その記念誌『むさしの』に、同会の記録係をつとめた菅沼重夫が「郷土史いろはかるた」を発表した。

3.6.　富士見文化財かるたの活用

富士見文化財かるたは、定期的なカルタ大会が開かれなかったことも大きな要因となり、市内の子供の遊具としては定着しなかった。しかし、郷土の歴史的事象を簡潔に表現した「作品」として活用されている。平成 6 年(1994）開館の市立中央図書館は、階段壁面のタイルに 16 組の絵札・読み句を焼付けている。平成 12 年(2000）開館の難波田城資料館は、常設展示室の鷹場を解説するパネルに[き]の札を使っている。

平成 25 年(2013) 4 月、市立関沢児童館が、富士見文化財かるたを 58 × 46cm のジャンボかるたに仕立て、「子どもフェスティバル」で子供達を遊ばせた（貸出も行っている）。このように活用されることは、作者の願いにもかなうであろう。

第 36 図　富士見市の文化財ハンドブック

郷土史いろはかるた

（菅沼重夫・作、大竹正太郎・監修 1989）

い いかめしく 鎧兜の 勝軍地蔵
ろ 路傍にも 歴史を語る道しるべ
は 埴山姫 土の 神様榛名さま
に 日本の 先住民族コロボックル
ほ 帆をあげて 新河岸川の高瀬舟
へ 平坦な 台地に一つ 地蔵山
と 東京へ 大正三年岡蒸気
ち 近づけば 空洞から「丁半」大けやき
り 臨終に 死後も救うと医者坊主
ぬ ぬきんでた 大形板碑で不浄門
る 類例は 桑名に一 社の一 目蓮社
お 大銀杏 樹令重ねて六百年
わ 若者の 汗にまみれた力石
か 観音が 百基も並んだ薬師堂
よ 世をすねて 遺臣の残党興禅寺
た 田の中に 家畜のための避難場所
れ 礫層に 夏枯れもなく湧く清水
そ そこここに 僅かに残る古墳跡
つ 伝え来し 難波田城主の五輪塔
ね 念願を 銭で綴った奉納額
な 南朝に 忠誠示した供養塔
ら 乱世の 昔を偲ぶ城の跡
む 村人の 暮しに生きた修験道
う 牛馬を 守護した路地の観音
の 農民の 悲願実った南畑争議
く 栗谷津の 水源護る 倶利伽羅不動
や 山路が かつては人馬の鎌倉路
ま 回す音で 二世安穏車地蔵
け 結衆の 月待板碑と私年号
ふ 富士見市 国定史跡の水子貝塚
こ 弘法の描いた 本尊阿弥陀堂
え 疫病を 鎮めた道場の弁財天
て 低地にも 古墳時代の住居跡
あ 争いは 堤をめぐって百余年
さ 境にも 地域を護る錫杖権現
き 禁令を おかして巨大な石の墓
ゆ 行く人の 無事を願って道標銘
め めぐり来る 庚申精進供養塔
み みあげれば 鐘楼門の大応寺
し 師を慕い 遺徳を偲ぶ筆子塚
ひ ひっそりと 白山信仰石の塔
も 門柱に 残る一 揆の傷の跡
せ 戦争の いたみを今も忠魂碑
す 過ぎし日の 名残りを伝える長屋門

第 37 図　富士見市立中央図書館階段壁面

第 39 図　ジャンボ文化財かるた
（2013 年富士見市子どもフェスティバル
写真提供：関沢児童館）

第 38 図　難波田城資料館の展示パネル

『富士見文化財かるた』関連年表

年	富士見市の動き（カルタと文化財保護）	他地域の動き
1947		12月　上毛かるた発行。翌年2月に第1回県大会
1955	この頃、山口和夫が鶴瀬村の板碑調査をはじめる	
1956	9月　三村合併により富士見村成立	
1957	9月　富士見村文化財保護条例制定	
1963	山口和夫編富士見村文化財保護委員会発行「板碑収録」	
1964	4月　町制施行	
1966		4月　文化財保護委員会の「文化財愛護モデル地区」制度始る 5月　伊丹市で「寺本公団文化財愛護少年団」結成
1967		1月　寺本…少年団が『文化財愛護かるた』作成（手製）
1968	11月　国文化財保護審議会が水子貝塚を史跡指定の答申 12月　社会教育だよりで郷土資料寄贈の呼びかけ	4月　伊丹市や鹿島町が昭和43・44年度文化財愛護モデル地区 6月　国家組織再編により文化庁設立
1969	5月　社会教育だよりで郷土資料寄贈の呼びかけ 6月　社会教育だよりで「ふじみ諸史縁起」連載開始 7月　社会教育だよりで富士見町郷土史同好会のお知らせ 9月　水子貝塚国史跡指定告示	12月　伊丹市で『文化財愛護かるた』刊行
1970	1月「ふじみ版画の会」発足 8月　加藤和徳『入間郡東部 路傍の庚申塔収録』発刊 以後、加藤は毎年のように石造文化財を報告 9月　公民館主催郷土史教室開始 12月　パンフレット『ふじみ諸史縁起』発行	
1971	1月　富士見町郷土史同好会本格的に発足 3月『郷土ふじみ』創刊号 4月　教育だよりに郷土史同好会のお知らせ 文化財専門職員採用	11月　鹿島町文化財愛護協会が『文化財愛護かるた』発行
1972	3月　入間東部4町合同遺跡分布調査 **11月「富士見文化財かるた」発表**	12月　川越市が文化財かるた公募
1973	4月　広報ふじみで同好会員分担執筆「郷土の歴史」連載開始 7月　南畑八幡神社獅子舞保存会結成 8月「富士見文化財かるた」普及版を制作 吉川・伊藤・大竹『富士見の石仏』郷土史同好会 入間東部地区合同民俗調査開始 市立考古館開館 11月　難波田氏を語る会 12月　郷土史同好会が『富士見のさんぽ道』発刊	1月　武蔵府中郷土かるた刊行 12月　川越市文化財かるた刊行
1974	6月　富士見市教育委員会により『富士見のさんぽ道』増刷 10月　社会教育だよりで「古文書等の把握についてお願い」	2月　所沢市郷土かるた刊行 5月　狭山市郷土かるた刊行 11月　別冊太陽『いろはかるた』
1975	3月　南畑公民館で農具展 11月　市指定文化財初指定	
1976	5月　社会教育だよりで郷土史同好会再出発のお知らせ 6月　『唄』伊藤正和私家版 8月　加藤和徳『入間東部の石造文化財』入東史談会	
1977	2月　「扇だこ」つくり講習会 4月　富士見市扇だこ保存会発足 7月　『南畑八幡神社獅子舞』伊藤正和著、保存会発行 11月　郷土伝統文化大会(第1回)開催 市史編さん事業始まる	
1978	12月　『郷土民芸　扇だこのつくりかた』富士見市教育委員会	
1979	3月　『お年寄りの語る郷土の昔ばなし』『ふじみの伝説昔ばなし資料編(一)』富士見市教育委員会	12月頃　入間市郷土かるた刊行
1980	1月　鶴瀬公民館郷土史セミナー参加者が「富士見市郷土史を知る会」を設立 3月　『富士見風土記』『ふじみの伝説昔ばなし　資料編(二)』富士見市教育委員会	12月　坂戸市文化かるた刊行
1981	考古館拓本講習会参加者による庚申塔採拓活動開始。83年から「考古館友の会拓本部会」になる	

参考文献（本文中に書誌を示したものは省略）

富士見文化財かるた・富士見市内の創作カルタ

富士見市郷土史同好会 1971 ～ 1973　郷土ふじみ創刊号～３号
小口益一 1973.03「『ふじみ文化財かるた』の制作にあたって」富士見公論 3 p24-25
小口益一 1973.04「地域に根ざした文化運動を--ふじみ版画の会を中心に」月刊社会教育 17(4) p74-80
小口益一 1973.11「『ふじみ文化財かるた』制作の一年」富士見公論 4 p20
小口益一 1975.12「版の絵とまつりをつくる女たち」遠い火に向って 6 p65-68
小口益一 1977.09「地域に根づく文化をつくりだす試み」入間地区公民館連絡協議会紀要 4 p39-44-
埼玉新聞 1978.4.16 p3「"健康かるた"が完成」，1985.11.30 p12「富士見市針ヶ谷小で『郷土かるた』作成」，1989.11.8 p14「10 周年で記念誌『むさしの』刊行／郷土史いろはかるたも」
小口益一 1979.09「地域文化と公民館--公民館主事は地域文化の発掘者たれ」月刊社会教育 23(9) p37-40
小口益一 1980.10「地方の時代は,地域の自立から」月刊社会教育 24(10) p10-18
小口益一他 1982.01「地域文化をどうつくるか」月刊社会教育 26(1) p10-21
小口益一 1982.07「地域の実践から拡がりへ」月刊社会教育 26(7) p44-45
小口益一 1984.01a『生きがいの版画. 1 (基礎技術編)』伝統と現代社
小口益一 1984.01b「版画交流展--地域ネットワークの試み」月刊社会教育 28(1) p60-70
小口益一 1985『版画：その技法と地域文化への拡がり』さきたま出版会
佐々木文江 1986「戦時カルタ」あすなろ３集 水谷東高齢者学院 p55-57
菅沼重夫 1989「郷土史いろはかるた」『十周年記念　むさしね』富士見市郷土史を知る会 p107-139
小口益一 1990「版画で地域の文化を創る」『社会教育における地域文化の創造』p84-99 国土社
若槻英隆 1990.「地域の変革と社会教育」『社会教育における地域文化の創造』国土社 p60-82
若槻英隆 2005「シリーズ『私の社会教育実践史』　公民館に憧れて(1)」月刊社会教育 49(10) p78-82
貴志祐子 2009「愛校心・郷土愛」針小だより平成 21 年 6 月号
小口益一・画、小口益一作品集編集委員会・監修 2010.10『小口益一作品集』さきたま出版会
広報ふじみ縮刷版　社会教育だより縮刷版　水谷東公民館だより

富士見市以外の郷土カルタ

久保田三千蔵 1968「兵庫県伊丹市寺本公団文化財愛護少年団」『文化財地域愛護少年団活動事例集』文化財保護委員会 p46-55
広報いたみ 1969.1.1「文化財を考えよう<5>文化財愛護少年団」，1970.1.1「文化財愛護かるた」
金田智成 1970.1「文化財愛護地域活動の推進」月刊文化財 76 p20-23
鹿島町役場 1971.10.10 広報かしま(速報版) 31 号 p1
宮野 礼一 1971.11「青少年と文化財愛護」文部時報(通号 1133) pp.48-54
文化庁・編 1970『文化財愛護地域活動事例集』(「地域開発の中における文化財保護について-茨城県鹿島町-」「文化財を守る地域ぐるみの活動-兵庫県伊丹市-」を含む。鹿島文化財愛護かるたについての記述内容から、実際の刊行は 1972 年と推定される)
伊丹市文化財保存協会 1973.1「十周年のあゆみ」絲海 第 1 号
埼玉新聞 1972.12.29 p3「文化財かるた募集 川越市」，1973.3.10 p3「文化財かるた 近くおめみえしまーす 川越市」，1974.3.11 p3「郷土かるたを製作 狭山市入間公民館」，1974.4.27 p3「郷土カルタ作る 狭山市入間公民館」，1980.1.4 p7「入間市に『郷土かるた』」
広報ところざわ 1973.7「郷土のカルタを作りましょう」，1974.2「所沢郷土かるたができました」
東上新聞社 1973.4.1 「『川越市文化財かるた』に池原画伯の作品採用」東上新聞第 30 号
山口勇ほか 1993「新座かるたができるまで」にいくらごおり 23
原口美貴子・山口幸男 1995「郷土かるたの全国的動向 その社会科教育論的考察」群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 44 p225-254
原口美貴子 1996『上毛かるた ：その日本一の秘密』上毛新聞社
原口美貴子・山口幸男 1997「埼玉県の郷土かるた集(第 1 報)」群馬大学教育実践研究 14 p45-67
日本郷土かるた研究会 2003『全国の郷土かるた -郷土かるた王国群馬からの発信-』群馬大学附属図書館
たき△れんたろう“郷土カルタ館” http://homepage2.nifty.com/taki-forest/karuta/karuta.html

カルター般

週刊少国民 1943.8.29 p14-15「愛国いろはかるた」,1943.9.19 p5-7「『敵国降り伏す』愛国いろはかるたについて」「愛国いろはかるた」
憲法普及会 1947「新いろはかるたの制定」『事業概要報告書』p44-45
中村幸彦 1970.4 「雅俗漫筆(一)」冬野 30(4) p1-3
森田誠吾 1970『昔いろはかるた』求竜堂
戸板康二 1972『いろはかるた随筆』丸ノ内出版
鈴木棠三 1973『今昔いろはカルタ』錦正社
森田誠吾ほか 1974『いろはかるた』平凡社 別冊太陽 9
戸板康二 1976『いろはかるた』駸々堂 ユニコンカラー双書
時田昌瑞 2004a『岩波いろはカルタ辞典』岩波書店
時田昌瑞 2004b『いろはカルタの文化史』日本放送協会 生活人新書
大牟田市立三池カルタ記念館 2006『カルタ』文渓堂
並木誠士 2007『江戸の遊戯　貝合せ・かるた・すごろく』青幻舎 大江戸カルチャーブックス
吉海直人 2008『百人一首かるたの世界』新典社新書
吉海直人 2010『「いろはかるた」の世界』新典社選書

平成 25 年秋季企画展解説資料①　郷土かるたの富士見

発行日 平成 25 年 11 月 16 日　発行者 富士見市立難波田城資料館
〒 354-0004 富士見市下南畑 568-1　　ＴＥＬ　049-253-4664

秋季企画展
郷土かるたの富士見
10月19日(土)～1月13日(祝)

秋季企画展
郷土かるたの富士見
10月19日(土)～1月13日(祝)
難波田城資料館特別展示室【入場無料】
午前9時～午後5時(月曜日、祝日の翌日、年末年始は休館)

富士見文化財かるた
富士見文化財かるた刊行会
あ
あさひさす
窓より見ゆる
富士の山
鶴瀬公団
時代の要求はいろいろの形で現われてきます。
公団という名の住宅群もその一つでしょう。
一、三〇〇家族です。
(ノルクスクリーン)
富士見文化財かるた
手刷第２期
鶴瀬公民館 蔵
イモ版は刷るたびに異なる

アンケートに
ご協力ください
秋季企画展
郷土かるたの富士見
10月19日～1月13日